

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

新しい2013年を迎えることになった。世界の経済活動は、欧州の債務危機も、米国等の先進国の低成長も解決されていない。東アジアの新興国、地域も、中国経済や日本経済の減速に、足を引っぱられてかならずしも好転が期待できそうもない。

それは、世界中の経済学者、知識人の英知を集めても、今までの経験が生かされない未経験の、世界総人口65億人、すべて総素人の時代への突入と考えられるからである。

従来の物の見方、考え方による手法では、現在の混沌としたカオスの時代は、結果が予測できない大変な時代へと変化していると考えられる。

ひたすらGNP（国民総生産）やGDP（国内総生産）の拡大を目指すことがはたして、くらしが豊かになるのだろうか、残念ながらマイナス志向になる新しい年のスタートである。

それは、結果としてお金至上主義、利益至上主義、いわゆる経済成長優先への反省である。

経済成長にともなって、環境破壊、公害が発生した現実、原子力発電所の事故は、好のむと好のまざるを問わず、人間社会全体の安定を損なう結果になりました。これが現実社会である。

ただ、ここで重要な物の見方、考え方は両極端にはならず、紀元50年～150年ごろ成立した代表的な大乘仏教経典である「法華経」の教え、真理の統一性、菩薩道、いわゆる利地的行為の実践をすることだと愚考する。それは、今現在の現実を離れて理想世界はないのである。

「他思故有我」、（相手のことを思い考えるところに己れの存在がある）の究極の仏教哲学を年頭にあたっ

著者：広島大学生物生産学部非常勤講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禪 禪（野風生）
雅号 樹泉

て考えてみたい。

それは、人間の煩惱と菩提=涅槃を考えると、娑婆（人間が現在住んでいる世界、忍土、忍界）での猿は木から落ちて猿であるが、政治家は選挙で敗けるとただの人間であるという教えが、解かったような気がする。そんな意味で、2013年の年頭にあって悩みに左右されない生き方の実践を考えてみた。

「煩惱即菩提」で悩を考え、「ブータン人の心を学ぶ」で、チベット仏教、いわゆるラマ教の物の見方を学び、お金があれば幸せかという現実を考え、「情報とは何か」で、高度成長期から、現実の社会の実情を知り、成長優先の考え方で何か忘れ去られているものはないかを考えてみることにする。

暮らしの豊かさとは一体、何なのか考えてみたい。

2. 煩惱即菩提を学び知る

仏教の世界の教えに、「煩惱即菩提」という教えがある。煩惱とは一般に、人間の心身をわずらわし悩ませる一切の妄念。貧、瞋、癡、慢、疑、見を根本とするが、その種類は多く「百八煩惱」、「八万四千の煩惱」などといわれ、煩惱を断じた境地が悟りであるとされ、菩提とは、煩惱を断じ、真理を明らかに知って得られる境地をいう。

この煩惱と菩提の、あい矛盾する「有」と「無」が「不二」、いわゆる二つに見えているが、実は一つであるという考え方であり教えである。

そこで、煩惱そのものについて深く学ぶことにする。一般に衆生、人々は煩惱によって業（行為）を起

